

有島武郎の詩と詩論

——新しい可能性を求めて——

宮 野 光 男

私は新しい芸術の傾向を魂に行く傾向と云はう。

「草の葉——(ホキットマンに関する考察)——」(大二・七)における魂論の結論で有島はこう予言している。そして、 \wedge 人生に相関する芸術家 \vee 、 \wedge 魂に浸透し——魂にまで行かうとする敬虔な向上 \vee を目指す者の一つの先駆的な存在として \wedge 後期印象派と概称される画家 \vee をあげている。

有島武郎著作集第四輯『叛逆者』(大七・四)所収の『叛逆者——ロダンに関する考察』(明四三・一一)における \wedge 醜と美とに対する標準の改造 \vee も、「ミレー礼讃」(大六・三)において、ミレーの基本的芸術観を支えているものが、 \wedge 私の魂を通して人と自然とを眺めてみたい \vee という視点を得て発見された \wedge 人間と自然との有機的な融合 \vee であるという指摘も、その文脈において捉らえられた理想的人間像—— \wedge 叛逆者 \vee ——の条件を示しているのである。そして、詩が \wedge 魂 \vee の象徴であると、人間の \wedge 魂は直接に人類に対

して自己を表現せんと悶えている、かくて彼は彼自身の詩に於いて象徴する \vee という「詩への逸脱」(大二・四)において展開されている詩論は、有島の、根源的な願望であるが、(註二)その意味では、有島の詩論は、魂から魂へ、という軌跡を描いて展開されたものだといふことができよう。

長い間この懐がれをもつてゐた。(「詩への逸脱」)

詩による魂の象徴の可能性の追求は、有島の長年の夢であった。しかし、現実には、詩人たることの不可能性を自らのうちに認めざるをえない存在であったことは既に見てきたとおりである。(註二)その有島が、 \wedge けれども或る機縁が私を促がし立てた。私は前後を忘れて私を詩の形に鑄込まうとするに至つた \vee と言うのである。

けれども或る機縁が私を促がし立てた。私は前後を忘れて私を詩の形に鑄込まうとするに至つた。どんなものが生れ出るか私自身と雖もそれを知らない。私は或は私の参詣すべからざる聖

堂を窺つてゐるのかも知れない。然し私にはもう凡てが已むを得ない。長くせきとめてゐた水が溢れたのだから。(同前)

これは、△魂に行く傾向▽を実現する表現形態が詩であることを明らかにしていると同時に、やむにやまれぬ思いをもつて、詩の世界への参入を決断するに至つたプロセスと決意の表明であり、「詩への逸脱」は、有島の魂論の、換言すれば詩論の、結章として位置づけることができるものなのである。

このことは、有島自身の魂の発見のプロセスをその背後において考えなくてはならないことであると同時に、これまでの、有島武郎の詩と詩論など(註三)において言及してきたように、それは、超越的な魂、つまり運命観、自然観、魂論などに見られた△超越的存在▽の可能性、有島の神秘主義的傾向、△死▽のもうひとつの位置づけかたの可能性について論究してきたことのひとつの結章として位置づけることのできるものでもある。

二

私は嘗て詩を音楽に次ぐ最高位の芸術表現と云つたことがあつた。

凡ての芸術は表現だ。表現の焦点は象徴に於いて極まる。象徴とは表現の発火点だ。表現が人間の覚官に依拠して訴へ、理知に即迫して訴へようとすることもかきさを忍び得なくなつた時、已むを得ず赴くところの殿堂が即ち象徴だ。だから象徴と

は、魂―若しそんな抽象的な言葉が仮りに許されるならば―が自己を示現せんとする悶えである。(「詩への逸脱」)

有島の、詩に対する△音楽に次ぐ最高位の芸術表現▽という評価と期待とは、すでに基本的には「惜みなく愛は奪ふ」(大九・六)の芸術論において表明されてきたことであり、その中で詩人とは、△その表現の材料を、即ち言葉を知的生活の桎梏から極度にまで解放し、それによって内部生命の発現を端的にしようとする人であり、△だから、その所産なる詩は常に散文よりも芸術的に高い位置にある▽と位置づけられている。

△内部生命▽ (註四) と△魂▽とが同義的に用いられていることは、この引用からも明らかであるが、それが、さらに、△表象とは愛が己れ自らを表現するための煩悶である▽というように、△愛▽という言葉に置き替えられているところに、一種の思想的展開を見ることが出来る。このことは、△象徴▽という、ひとつの表現形式をもって、有島の内面性が、それぞれの時期の特色を帯びながら認識され、何らかの形において表現されんとして悶え続けてきたその軌跡を、詩的表現を通して見出すことができるということを表していることになる。つまり、これまでに述べてきた有島武郎の詩と詩論において明らかのように、それぞれの時期における具体的な、詩もしくは詩的なものに対する関心と憧憬、あるいは個々の詩人に対する興味と関心の内的契機として捉えることができるということなのである。本論序章において、有島の詩と詩論への関心を通して、有島の内面性の、換言すれば精神構造の解明の、一つの手掛かりで

あるとしたのもそのためなのである。(註五)

「詩への逸脱」は、「惜みなく愛は奪ふ」の芸術論の要約であると同時に詩論の理論篇における結章としての位置づけをすることができるとは確かなことであろう。そして、「惜みなく愛は奪ふ」における愛の論理の本質、△愛の絶頂における死▽という愛の位置づけ方は、たしかに「詩への逸脱」における魂論の象徴的表現の愛論、△恋は生命の灼熱であつて、而して死は生命の破却だ。何といふ矛盾だらう。(中略) 恋人はその愛するもの、胸に死の烙印もて彼自身を象徴するのだ。▽というように受け継がれているのである。そして、有島の愛論が、根深い否定的自己認識に裏打ちされたものであることもすでに述べたとおりであるが、それが△神義論的懷疑▽という形でとらえられた懐疑的人間論のさらなる深化したものであることは、川鎮郎氏の論文(註六)において詳細に述べられているところである。

もちろん、有島がこの段階で座視していたわけではなく、ホイットマンに触発されながら、否定の肯定化を試みつつ、それからの脱出を志向した者であつたことは既に述べた通りである。(註七)したがって、その愛の論理を——それが、たとえ、死の論理と表現において結びついていたとしても、「独断者の会話」(大一一・六)や、「泉」所収の後期諸短篇における否定的人間像に直接結びつけ、さらには、波多野秋子との死において実現したのだとする考え方は、いささか早計に過ぎるといふことになる。

つまり、△けれども或る機縁が私を促がし立てた。私は前後を忘れて私を詩の形に铸込まうとするに至つた。どんなものが生まれ出

るか私自身と雖もそれを知らない。私は或は私の参詣すべからざる聖堂を窺つてゐるのかも知れない。然し私にはもう凡てが已むを得ない。長くせきとめてゐた水が溢れたのだから。▽という思いは、新たな可能性を求めてなされた、有島の決意表明なのである。

秋田雨雀が、△誰でも有島武郎君の作物を読んでゐた人々には「詩への逸脱」は可なりの驚きを与へたであらう、ここでは、彼の芸術的心境は、実生活と全く引離すことが出来なくなつてゐるばかりではなく、驚くべき変化が彼の芸術観の上に表はれて来てゐる▽ (註八) という、有島の芸術観上の驚くべき変化は、いったい何であつたのだらう。

あるいは変化への願ひをもつた存在であつたことの表明であらうか。なぜならば、有島は、文学者として、△詩▽に決断し、それへの第一歩を自覚的に踏み出そうとしていることを、この決意のなかに見ることができるところである。それは、かつて「リビングストーン伝」第四版の序において、芸術に自己完成の期待を託した有島の思いと等質の決断であり、「詩への逸脱」は詩と詩論におけるさらなる深化を示していることになるからである。

△或る機縁▽——この言葉に対して、一、現実的契機、つまり生活上の諸問題は何かという問いと、二、内面の要求として位置づけた場合の可能性とが問われるところであるが、一、二ともどもに、先に述べた△芸術志向▽、あるいは、ホイットマンの詩人としての誕生の契機となつたエマソンの存在の有無が問題となるところである。

あるいはまた、危機状況認識としての非第四階級性（「宣言一つ」大一一・一）、文化の担い手ではあり得ない者としての絶望意識（「文化の末路」大一一・一、「行き詰れるブルジョワ」大一一・七 など）が問題となるところであるが、有島の内部にあつて、長くせきとめられていた水が、今、溢れたということは、かつて有島に詩への決断を躊躇せしめていたものが、「惜みなく愛は奪ふ」にあるように、△愛の要求に対する私の感受性の不十分▽さであり、△鋭敏な感受性▽の欠如が原因であつたことを思うとき、有島の詩人としての生きかた、つまり△その表現の材料を、即ち言葉を知的生活の桎梏から極度にまで解放し、それによつて内部生命の発現を端的にしよつとする人▽としての生きかたに賭けることによつて、△深い愛の体験者▽に生まれ変わろうとすることを意図した存在であつたということができるのである。

人間は十分に恵まれている。私達は愛の自己表現の動向を満足すべきあらゆる手段を持つてゐる。（「惜みなく愛は奪ふ」）

有島のこの発言に対して、このところでお、△奪う愛▽の論理をもつてして、なぜ非第四階級理論を破ることができなかったのか、という問題が残されている。

あるいは、△知的生活▽への決別が、△言葉▽へのそれであることが、一種の矛盾であるという考え方（註九）もあるが、その意味では、△逸脱▽の論理は、一度否定したものの肯定という屈辱的再

確認の意味をも含んでいると考えられるところでもあるが、これは、むしろ言葉の純化の方法の摸索のプロセスと考えることができるであろう。

Aはただ、一つの活路を詩に求めた。然しながら彼れは人の知るやうな日本語を知らない。又文人が専用する表現を知らない。なほ又、彼れには詩の要素とせられる詠歎がない。その詩は呪文のやうだつた。醉漢の囁言のやうだつた。ほき／＼とその詩は枯枝のやうに、どこでも折れた。その枯枝のやうな枝の一片は、その一言一句は、嘗てまがふかたなき水々しい枝であつて、根から養分を吸ひ取り、太陽と空気に挨拶を送られたものであることを語るにしても、人は固より見も返らなかつた。（中略）Aは人間なみに詩を作らうとした。而しいつの間にか詩の女神を真裸にしてみました。恐らく女神はそれを恥ぢはしまし。然しながら人々は笑い切れないやうにAの迂愚を笑つた。彼れは詩に於いても上に向つて真倒さまに落ちて行つたのだ。詩も又重すぎるとAはいひ出した。（「心に沁みる人々」大一一・八）

Aにことよせて語る詩への思いはまた、有島の詩、つまり愛に対する実感だつたのであろう。それは△重すぎる▽ものであつた。とつてい△活路▽たりうるものではなかつたのである。にもかかわらず、有島をして△詩▽に走らしめたものがあつたとすれば、それは切△詩▽に活路を求めざるをえない、内面の要求の重さ、あるいは切

実さだったのではないだろうか。

此頃になつて詩人の境界が羨まれてなりません。(中略)然し詩人となるべき天分を受けてゐないかなしさにハその境界ハ単ニ蜃気楼を望むほどのはかなさです。(川田順宛書簡、大一〇・一一・三二)

川田順の『山海経』の獻呈を受けた有島は、このような謝辞を述べている。もちろん、歌人に対する謝意の表明であることを考えに入れておかねばならぬ発言ではあるが、矢張詩や音楽が羨しいとおもひます、という吹田順宛の書簡(大一一・一・一九)にみられる詩への憧憬のなかに、有島の、いわば起死回生の手段としての詩であることの位置づけをしようとしている有島を見ることができるところでもある。とくに、人としての私は今危機に臨んであります。内部の生命が脅かされてゐるやうで創作が出来ません。前)という、内面的危機状況からの脱出を目論むものであり、有島にとっては、詩への憧憬は、新しい衣裳(大八・一二・一六吹田順宛書簡)志向への具体化の方向を意味するものだったのである。

三

これまでに見てきたように、有島の詩への期待は、愛の成就、内部生命の充実、魂の充足への期待を意味するものであった。どの局

有島武郎の詩と詩論

——新しい可能性を求めて——

面においても、生の充実が、前提とならなければ生じ得ない世界が待望されているのである。このような考え方の、いったいどこに死が忍び寄る可能性があるというのであろう。

死のみが辛うじて、凡てを発無してもなほ飽き足らない恋人の熱情を髣髴させるのだ、恋人はその愛するもの、胸に死の烙印もて彼れ自身を象徴するのだ。死(詩への逸脱)と、「惜みなく愛は奪ふ」において展開した愛の絶頂における死の論理をもつて、死が、象徴のひとつの可能性としてあることを云わなければならなかつたは、いったいなぜであらう。

もちろん、だからといって死の烙印が、単なる手段化された死であつたり、強調表現であつたりするとはいえない、一種の切実さを持つてゐるものであることも事実なのである。とくに、ついに決断した詩の世界において形象化した死が、魂の象徴である詩的表現であることを思うときに、そこに表現されている死が、いわゆる死そのものであるかのような印象を与えるほど切迫したものであるが、本質的にはやはり、あくまでも形象化された死なのである。

秋田雨雀も、そのことを、

彼は彼の死の前に『死』を求めなければならないあらゆる要素を彼の生活の中に同化してゐるに相違ない。ちやうど植物の葉がその葉の中に色々な要素を同化してゐるやうに、それから彼は『生を容赦なく踏みこむその不可思議な生命』を得てゐた

のに相違ない。(註一〇)

と指摘しているように、それは、△生を容赦なく踏みじる▽ものとしての△不可思議な生命▽の謂であることを、このように指摘しているのである。つまり、ここには、方法化された、生の逆説的認識であるところの△死▽として位置づけられているとの認識があるのである。

四

ところが生命は、それ自身で表現されるというのは不可能なのである。死によってのみ生命が表現として全的に保有されるのだ。ここに人間の悲劇がある。死によってのみ生命の表現を保持するといふことは、恐ろしいパラドックスではないか。

(註一一)

椎名麟三が、このところで述べている世界、それは、有島の、生に対する逆説的認識としての死の世界をみごとに云いあてているように思われる。そのことは、たとえば、有島の「運命の訴へ」(大九・九)に見られる背理的な希望の表明である決定的な否定が、プラスに転換する可能性への発言、

然しこの手記を書き上げてしまつたら、或は俺れの生活の内容がはつきりして来るかも知れない。さうしたら俺れのこれから

の方針が自分にはつきりと分つて来るかも知れない。

が、本質的には生を求めてやまぬ有島の、逆説的表現であったことはすでに述べたところである(註一二)が、有島が、「惜みなく愛は奪ふ」において展開した愛の論理も、この文脈において捉えることによつて、より明確に理解することができるように思われるのである。つまり、方法化された、生の逆説的表現としての△死▽であるということもできる、ということなのである。「瞳なき眼」に集められている八篇の詩が、その本質において死を詠っていることから、そのことを知ることができるところである。(補註)

「愛」(大九・八)において、△あれは私の内部生活の偶像破壊の為に書かれたもの▽であつたのだと述べていることも、奪う愛を強調すること自体が、方法化された、生の逆説的認識であるところの死の優位性を強調することと等質の試みであり、そのことによつて愛の本質を明確にしようとした有島の意図を表しているのである。

この論理構造をもつてすれば、積極的な決意表明であるにもかかわらず、負の響きをもつた△逸脱▽という言葉で、詩に対する期待と飛躍とを表そうとした有島の意図を理解することができるのである。つまり、△詩▽による偶像破壊、あるいは非神話化の試みを、詩そのものの本質にある真实性を表現する魂の真実さとともに認識しようとするこの逆説的表現が、△逸脱▽という言葉によつて形象化されているということになるのであろう。それはまた、一種の脱出論(註一三)をその内容としているともいふべきものであ

る。

ところで、先に触れた権名の論理、△死によってのみ生命の表現を保ち得る▽という△恐ろしいパラドックス▽は、さらに、決定的な△パラドックス▽の前提になつてゐることを知らなければなるまい。△他人の死はそれでい、▽のである。だが、△自己の問題としては、如何にして自己の表現を得る▽ことができるのであろうか、という問いに対して権名は、

しかし……そのためには自分は死ななければならぬのである。ここに宗教への可能性が生れる。しかし神のない人間にとっては、永久に恐ろしいパラドックスであらう。(同前)

と云うのである。

△自己が自己の生命を全的に表現したいというのは人間の本来的な欲望なのだ▽が、この逆説の論理には、一つの陥穽があることが示されているということになる。△自己の問題としては、如何にして自己の表現を得るだらうか▽という問いに対して、神の不在を意識的に言わなくてはならなかつた者にとっては、答えはかくのごとく絶望的だといふのである。

△神のない人間にとつては永久に恐ろしいパラドックスである▽とは、考え方によつては、いかにも冷酷な宣言である。発狂か死しかない人間(「運命の訴へ」)にとつて、神が不在であるといふことは、決定的な否定を意味しているからである。これこそ、まさに漱石のいふ、△死ぬか、気が違ふか、夫れでなければ宗教に入る

か。僕の前途には此の三つのものしかない▽ (註一四) という世界なのである。

それにもかかわらず、有島が、あえて死をもつて生を表現しようとしたことは、はなばなしい自爆的行為の敢行であるか、さもなければ、神、もしくは神に変わるものへの信仰のようなものを持つてゐたこととなる。つまり、有島の信仰は、詩に対する期待、信頼——あえて云えば詩信仰という形で表現されようとしてゐるのではないか、ということなのである。

それは、あるものへの憧憬という言葉で表すことのできる状況なのであり、△憧憬は、常にその人における絶望に依存することなくして生きていることが出来ない▽ (註一五) ものだという意味で、パラドックスとしての△死▽が、再び浮かび上がってくるのである。

五

序論において有島の内面の要求を憧憬という言葉で表したものとして、△憧憬▽、△聖性憧憬▽、あるいはそれに類するものとして△第三の開眼願望▽を考へて来た(註一六)のであるが、これらの憧憬もしくは願望は、その本質において新しい愛の論理追及の顕現であることは云うまでもないことである。それが、具体的なイメーヂとして形象化されたものが、たとえば「独断者の会話」(大一二・六)の、△この力を一点に吸ひ集める磁石のやうな美しい力が早く私を救いに来てくれ▽という願ひであらう。先に取り上げた△運命のやうな女▽ (「平凡人の手紙」大六・七) との出会いへの期待の

文脈において捉えることのできる根源的願望をこの思いのなかに見ることができるところなのである。

つまり、愛論の具体化を女性論に見ることができるのである。これが、poetic woman や、Ego をその原点にすえて考えることのできる有島の女性観であることを再び確認しておきたいと思う。

また、このところに、「瞳なき眼」のなかに向たわれている「可憐な小さい瞳が……／＼淋しさ……せめて叫べ、ひと声。瞳よ。＼に込められている願いが、有島の新しい可能性追求への負の讃歌としての意味をもっているものとして位置付けることのできる可能性を見ることができるのである。

【註】

- 一 野島秀勝「詩への逸脱」——有島武郎論（最終回）（『文学界』昭四〇・三）にすぎれた「魂」論がある。
- 二 「惜みなく愛は奪ふ」論（「有島武郎著作集第十一輯『惜みなく愛は奪ふ』を読む」）梅光女学院大学「日本文学研究」第二三号 昭62・11
- 三 一連の有島武郎の詩と詩論に関する論考（「有島武郎研究——『詩への逸脱』をめぐって（一）」）「有島武郎著作集第十五輯『芸術と生活』を読む（二）」梅光女学院大学「日本文学研究」第十一号—第三号昭五〇・一一—平九・一）、「有島武郎研究——瞳憧憬をめぐって——」（昭四九・一一 梅光女学

院大学「日本文学研究」第九号）、「有島武郎——盲目状況認識をめぐって——」（「表現と構想」第三号昭五〇・一〇）

四 山田昭夫「惜みなく愛は奪ふ」頭注（角川書店刊「日本近代文学大系第三三巻『有島武郎集』昭四五・三）

五 註三に掲げた（一）に同じ。

六 川鎮郎「有島武郎における「神義論」的懐疑の成立」（『言語と文芸』昭四二・七）

七 註三に同じ。

八 「二つの手（追憶手記）」（『泉』終刊有島武郎記念号 大一一・八）

九 註四に同じ。及び、同書所収の山田氏による補注三二一。

一〇 秋田雨雀「人間苦闘史の一頁」（『婦人公論』大一一・八）

一一 椎名麟三「小説論断片」（昭三一・二二—三三・一）

一二 註三の盲目状況認識論参照。

一三 脱出論は、否定的な消極論のように思われるが、その内実は肯定論である。また脱出論の可能性を言う場合、視点としてのドン・ファンが存在を考えることができる。（『独断者の会話』Eの登場する章がクローズアップされるところであるが、脱出論、ドン・ファン論は、ともに有島の新しい可能性論として稿を改めて

論じたいと思う。）

一四 夏目漱石「行人」（大元）

一五 註一一に同じ。

一六 註三の瞳憧憬論参照。

補注
『瞳なき眼』所収の八篇の詩については、おりにふれて述べてきた(註三の諸論)が、改めて『瞳なき眼』論としてまとめて論じたいと思う。